「ことば」の不思議

身体性・社会性・空間性・歴史性

学術俯瞰講義04　佐藤健二（文学部）

「‡:このマークが付してある著作物は、第三者が有する著作物ですので、同著作物の再使用、
同著作物の二次的著作物の創作等については、著作権者より直接使用許諾を得る必要があります。」

動物としての人間が

最初に獲得した道具

無形の

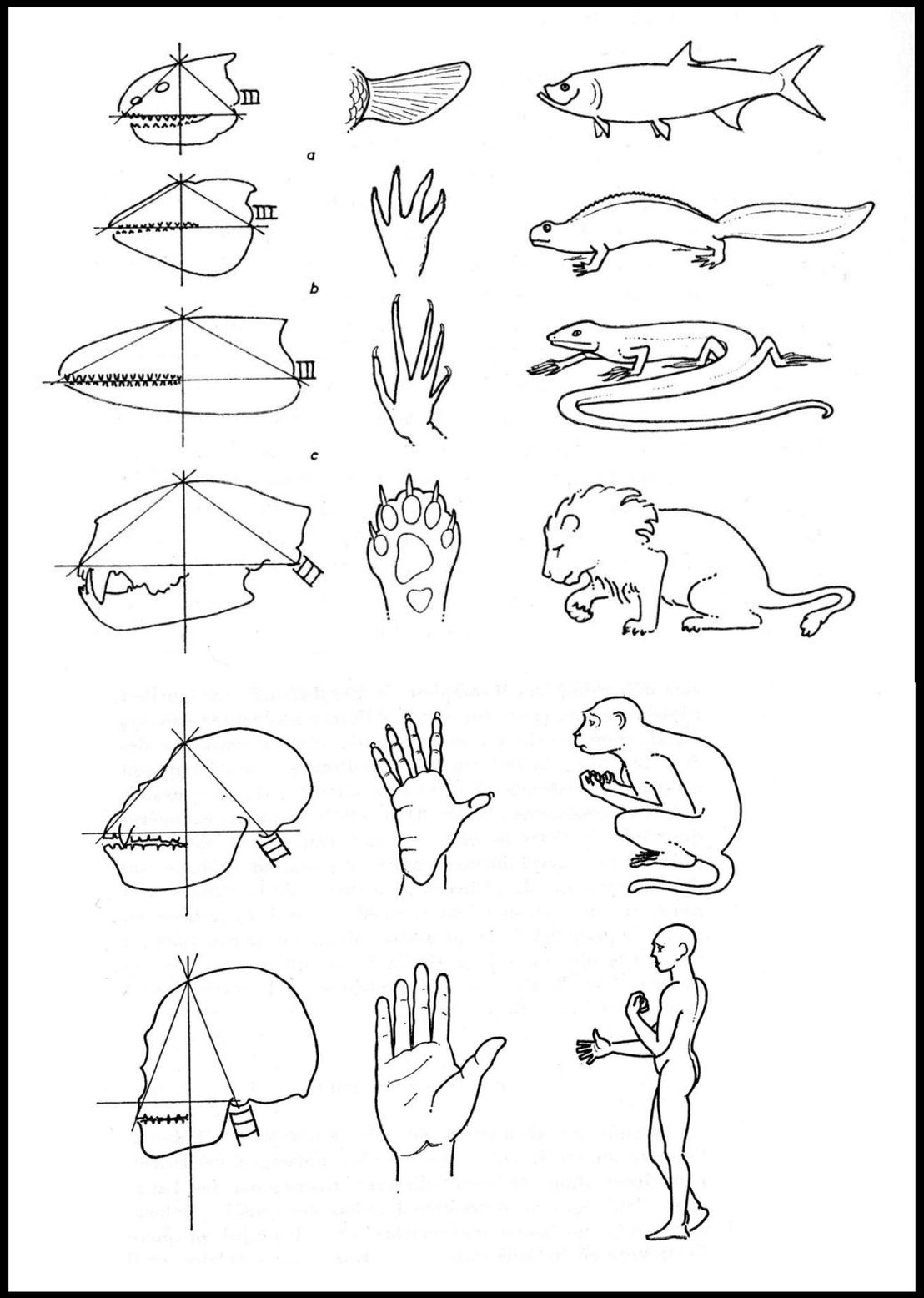
可能性に満ちた

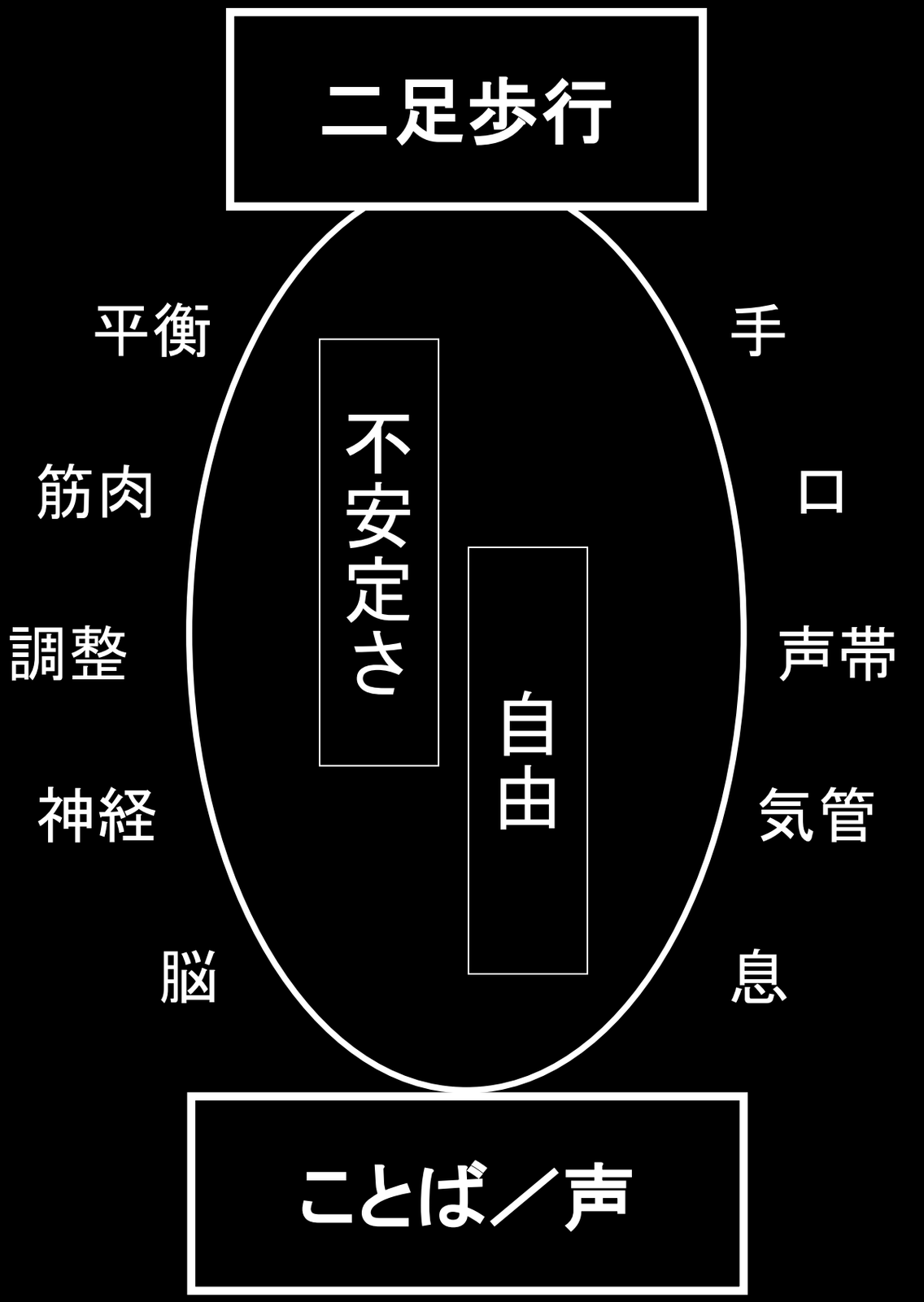
不思議な道具

Phase ①

「身体」である

ルロワ・グーラン『身ぶりと言葉』





アンドレ・ルロワ=グーラン著；荒木亨訳 『身ぶりと言葉』新潮社、1973年、P49、図表番号8

声は

身体を楽器とする

音楽である

声はどんな道具か？

物質

現象

ことばは

もうひとつの

手である

触れられないもの

見えないものを

つかむ／動かす

Phase ②

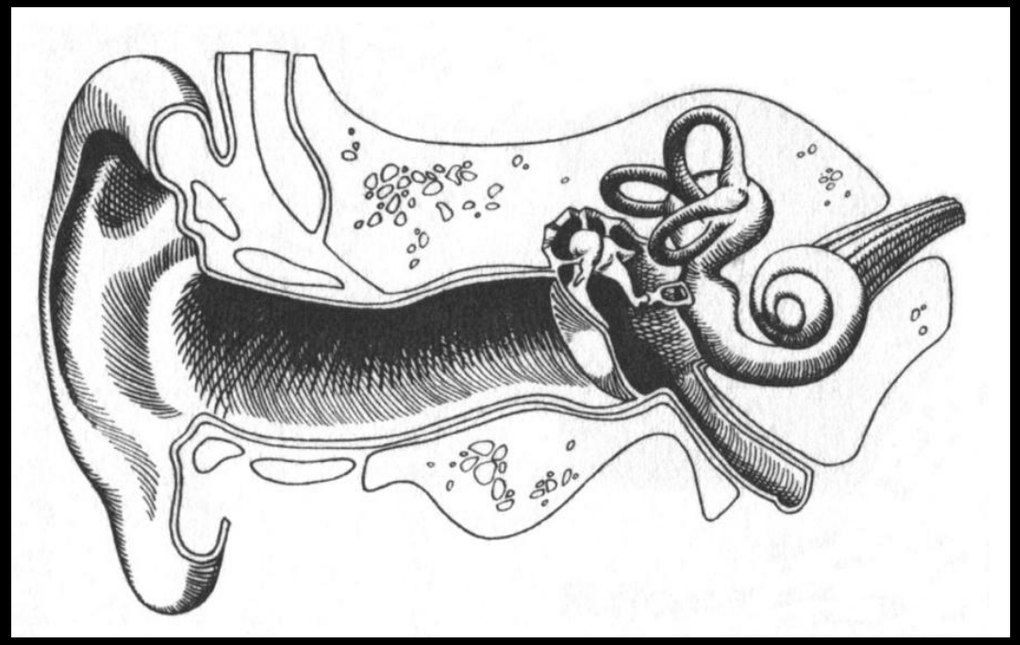
「社会」である

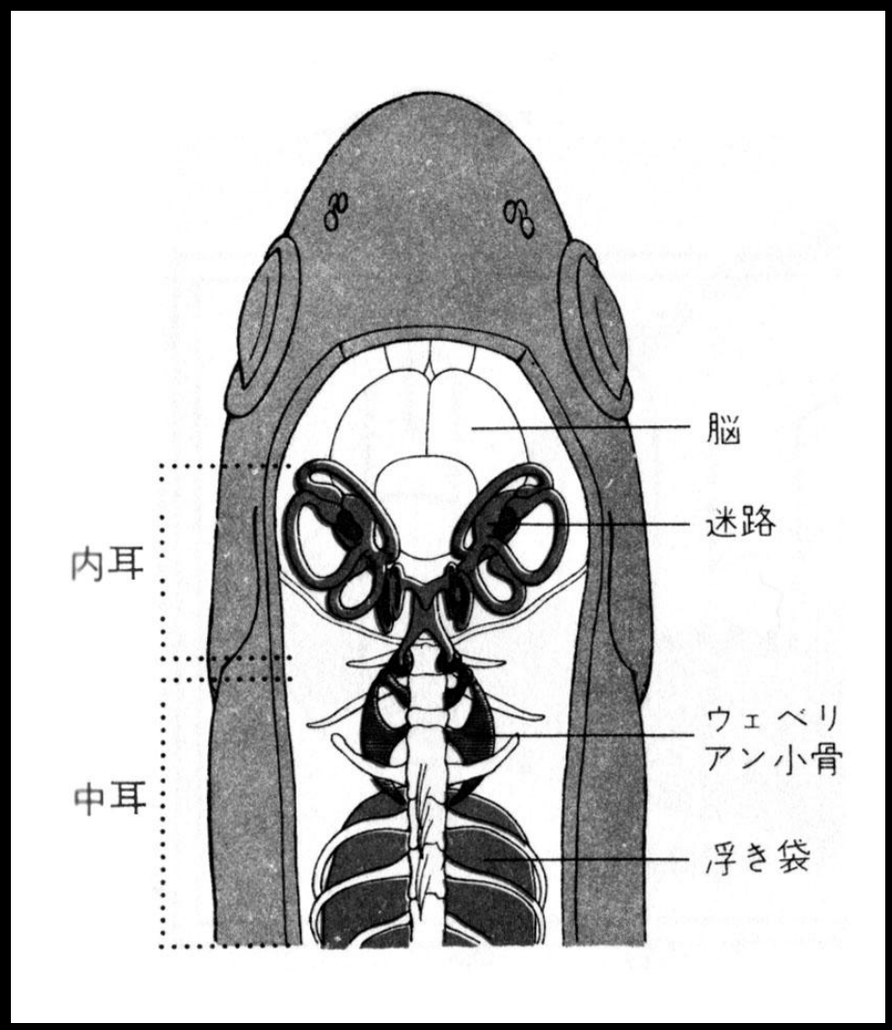
ことばはなぜ通じる

意味の共有？

言語の習得？

声を受容する「耳」





声のメカニズム

身体性

自己

身体の共振
空間の共有

他者

声のメカニズム

身体性

自己

他者

身体の共振

空間の共有

意味の共有

社会

個人

声のメカニズム

身体性

自己

身体の共振
空間の共有

他者

意味の共有

社会

〈公共〉　　〈伝達の道具〉

＝

社会をつくる

個人をつくる

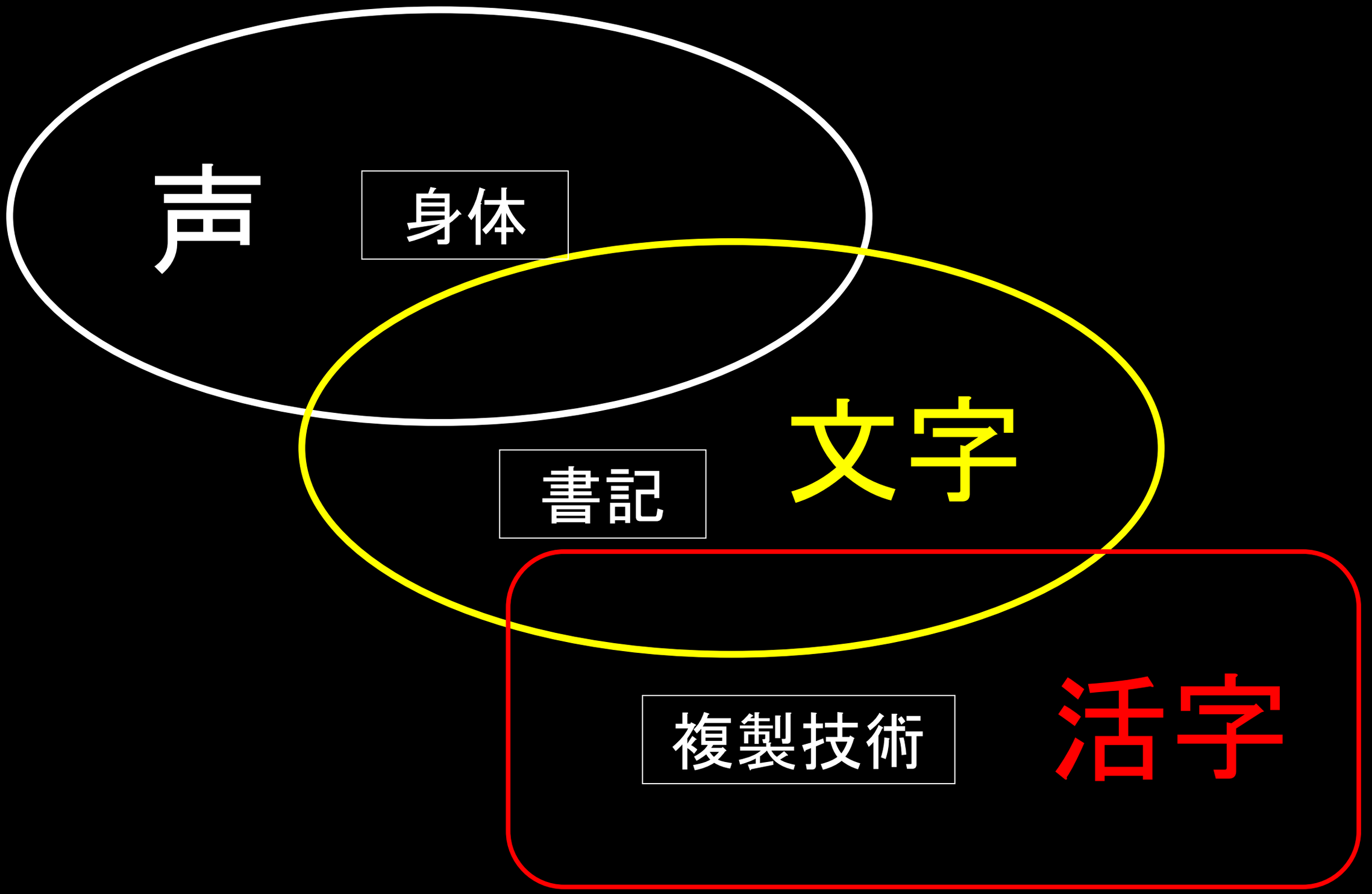
＝

〈私〉　　〈思考の道具〉

ことばは

もうひとつの

脳である


声
身体
書記
文字
複製技術
活字

外部化
物質化

声

身体

書記

文字

対象化
客観化

公共化

複製技術

活字

斧
（おの）

鋸
（のこぎり）

丸太
（まるた）

鑿
（のみ）

三段論法（推論の一つの形式）

① 寒い所にいる熊は白い（大前提）

② 北極は寒い所である（小前提）

③ 北極にいる熊は 白い（結論）

Phase ③

「空間」である

ことばの把握における「空間」概念の有効性

①声の空間性／音読と黙読、空気の共振

②空間とは複数性を内包している場所
　複数のものの共存において開かれる場

③意味のネットワーク性に光をあてる
　ことばのもつ「網」のような性格

④ことばの空間のなかで人は成長する
　ことばの海のなかで泳ぐ能力を得る

「網」としてのことば

「結び目」としての意味

=

他のことばとの関係

位置関係

道具とは何か？

物体

媒体

独立した存在？

機能が内在している？

「割られる」対象がともに存在する場
対象との共在

斧

手段の複数性
「切断」の手段が多様に存在する空間

分裂しやすい言語空間

仲間のことば

共同体のことば

「翻訳」

ことばは

もうひとつの

皮膚である

Phase ④

「歴史」である

ひとつの語彙にも

歴史は

刻みこまれている

理屈っぽい

理屈倒れ

屁理屈

論理

理屈

理窟

偏屈　鬱屈

退屈　窮屈

society

société

社会学

世態学

ことばの重要性

道具としての大切さ

「身体性」と「社会性」

もうひとつの「手」　　伝える

もうひとつの「脳」　　考える

もうひとつの「皮膚」　　感じる

わかりやすさを疑う

未知と向かい合う